

目次

巻頭言：本質を見極める感性と理性	1
追悼	2
教室人事	4
教室員のひとこと	5
留学報告	12
診療の集計	
1. 外来および入院	14
2. 手術	15
研究業績	
1. 論文発表	16
2. 学会・研究会への参加	17
3. 研究助成	21
4. 学位	21
教育関連の活動	
1. 学生実習	22
2. 卒後臨床研修	22
3. 講演・講義	22
4. セミナーの開催	22
5. 小児外科・病理カンファレンス	23
6. 抄読会	23
その他	24
編集後記	25

* 表紙はポセイドン神殿、スニオン岬（ギリシャ）

巻頭言：本質を見極める感性と理性

獨協医科大学越谷病院
小児外科教授 池田 均



私は小児がんを長いこと、研究対象の一つとしてきました。学生の時に聞いた恩師の講義がきっかけであり、入局してからは小児がんに病んだ子どもたちの姿を目の当たりにしてこれを医師としてのテーマにしようと思ったわけです。

その後、がん研究は長足の進歩をとげました。がんが遺伝子の病であることは今や誰も疑わない事実です。しかし、そう理解されてからの歴史は意外に浅く、免疫学や遺伝学、分子生物学などの基礎医学の進歩の上にそのような理解が可能となったわけです。約20年前、日本癌学会総会の会場で「がんは遺伝子の病」との講演を聴いたときの興奮は未だに鮮明な記憶として残っています。以来、多くの基礎医学者や臨床医が遺伝学や分子生物学の手法を用いてがんの研究に携わってきました。がん遺伝子やがん抑制遺伝子の発見など、その成果は枚挙に遑がありません。一方、がんの研究には多くの無駄がつきまとうことも事実です。がん細胞の染色体や遺伝子はいわゆる“ぼろぼろ”の状態にあり、どれを調べても何かしらの異常が見つかります。また、その異常と臨床との関連をみると何かしらの相関がしばしば検出されます。研究のための研究は常に成立し得るということです。ですから本当の意味で医学の進歩に寄与する、あるいは後世に残る研究をしようと思ったら本質を見極める感性と理性が極めて重要だということになります。

臨床医にとっても同様のことが言えます。新たな臨床的事実を見逃さず、また患者を不測の事態から守るためには、丹念な観察と洞察力、さらに十分に思考し検証できる論理力が必要です。そのような能力をまとめて臨床医のセンスと言うこともあります。小児外科医は小児を対象とする外科の専門家です。繊細な技術は勿論、洗練された臨床医としてのセンスを兼ね備えて初めて世に貢献できる医師になり得るはずで、私たちが獨協医科大学越谷病院小児外科の医師は常にそのような信念のもとに専門家としての自己研鑽に励んでおります。その結果、地域や多くの患児に貢献できることの喜びと自負ならびに誇りをも感じております。「獨協医科大学越谷病院小児外科のあゆみ」は当教室の1年間のまさに歩みを記録したものです。まだまだ不十分なところが多々あるに違いありません。しかし、一つずつを確実な一歩とすべくそれぞれが歩んだ足跡がここにあります。ご覧いただく皆様方にはそうした教室員一人一人の姿を少しでも窺い知っていただき、またご指導、ご鞭撻いただけたら真に幸いと存じます。

追悼

木崎義行先生は平成 14 年に獨協医科大学を卒業し、同時に獨協医科大学越谷病院小児外科に入局されました。研修医として 2 年間、勤務され、昨年、高知県近森会近森病院に赴任し、一般外科の研修を終了され、本年 4 月からは群馬県立小児医療センターで小児外科医としての修練を始めただけでした。

先生は医師となって以来、休む間もなく病棟、外来、手術室と忙しく飛び回り、食い入るような輝く眼差しで先輩たちの話を聞き、その姿から学び、また病める子どもたちの一日も早い回復を願って弛まなく努力を続けてこられました。先生は子どもが好きでした。子どもたちが手術から回復し、病を乗り越え、元気に退院していくことを心から喜び、励みとしておられました。ですから、先生はいつも子どもたちの人気者でした。先生がサンタの服を着て、病床を一つ一つ回り、やさしい笑顔でプレゼントを手渡していた姿はまさしく昨日のように鮮やかに思い起こされます。

先生は実直で優しく、正義感に強く、面倒見のいいお人柄でした。勤務する病院ではいずれにおいても後輩や同僚から慕われ、また先輩からは温かく大事にご指導をいただくことができました。先生は高知にでかける直前、“大丈夫でしょうか”と遠隔の地に一人で赴任することの不安を述べておられました。しかし、その後、学会でお会いした際、“先輩が皆、やさしく指導してくれます”と嬉しそうに語り、できればもう一年、高知で研修を続けたいと述べておられました。

私が群馬の地への移動を命じてからは、先生は再び、新たな環境で医師としての修練に真正面から取り組んでこられました。先生が小児専門の医療センターで小児外科の最先端の医療に接し、張り切って頑張っておられることを周囲の先生方から聞いたたびに、本当に心から誇らしく思った次第です。

甲府の学会の折には一緒に温泉で過ごし、先生の将来について語ったのはついこの間のことです。その時も先生は“できればもう一年、群馬で小児外科の研修を続けたい”と言っておられました。行く先々で同僚や先輩に愛され、子どもたちに慕われ、先生は医師として生きることの喜びを実感されておるのだと感じ、先生が小児外科医らしく着実に逞しくなっておられるのを、一人の小児外科医として心から嬉しく思った次第です。

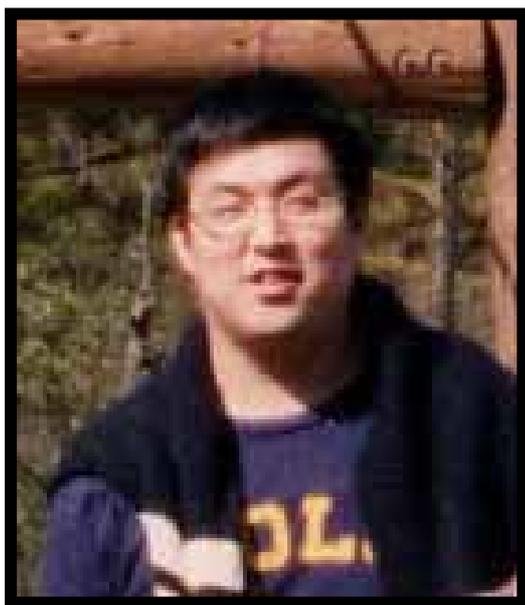
外来で一緒に机を並べ、手術室では一緒に汗を流すのが夢でした。若すぎます。何とも無念です。これからの人生でした。家庭を築き、親孝行、家族孝行、まさにこれからという時でした。しかし、先生が医師として、一人の人間として、私たちとともに生きて証は数多くの仲間や子どもたちの心に永遠に残ることでしょう。医師になってわずか 4 年に満たない期間ではありました。しかし先生の温かい心と、深い英知と、研ぎ澄まされた技術により、病

から回復し元気に成長している多くの子どもたちがいることを忘れないでください。ご家族の皆様におかれましては、どうぞ誇りに思い、同時に先生の労を犒いいただきたく存じます。どうか先生が安らかに永眠されますよう、心からお祈り申し上げます。合掌。

獨協医科大学越谷病院小児外科

教授 池田 均

(2005年11月14日、告別式弔辞より)



派遣先の病院旅行で

教室人事

2005年7月1日から高安 肇講師がアイルランド、ダブリンの Our Lady's Hospital for Sick Children, Children's Research Centre へ留学となり（詳細は留学報告）、同日、田原和典講師が着任した。田原和典講師は東京大学小児外科からの派遣で同付属病院小児外科からの移動である。したがって、院内は池田、石丸、高安、大谷、山岸の体制から、7月1日より池田、石丸、田原、大谷、山岸の布陣となった。また、学内助手藤野順子君は前年から引き続き八潮中央総合病院へ学外派遣中である。学内助手木崎義行君は一般外科の研修から小児外科特に新生児外科の研修を目的に、4月1日付で高知県高知市の近森会近森病院から群馬県立小児医療センター外科へ移動となった（2005年11月8日、病気により永眠）。

非常勤講師はこれまでどおり、群馬県立小児医療センター形成外科部長浜島昭人先生と社会保険船橋中央病院形成外科部長蓮見俊彰先生に形成外科の外来診療、手術、教育を担当していただいた。さらに群馬県立小児医療センター外科部長黒岩 実先生と埼玉県立小児医療センター外科医長内田広夫先生には引き続き非常勤講師としてそれぞれ鏡視下手術の教育と研究指導を担当していただいた。



2005.7.8 病院前

教室員のひとこと

「2005 年を振り返って」

石丸由紀

2005 年は重大な事故や事件が世間を騒がせ、公共機関への信頼が揺らいだ年でした。JR 西日本福知山線脱線事故や、マンションなどの耐震偽装問題。人為的なミスが多くのお客様の生命や財産を奪うという、重大な事件でした。私たち医療の業界でも、「安全」という言葉は日増しに重要性を増してきています。人が関わる仕事である以上、全くミスがないということはありません。それが事故につながらないようにするには、自分の認識を過信せず他人にもチェックをしてもらう(ダブルチェック)こと、ミスを正直に申告し、何が原因であったかを追及し、現システムの欠点を改善する、この地味な作業を積み重ねていくことです。エビデンスに基づいた医療を行うことも必要でしょう。また、万が一事故が起きた場合には隠蔽するのではなく、患者様あるいはご家族に説明を行っていくべきです。現代の医療は多様化、専門化、分業化しており、一人の医師が患者に関わるすべてを監視し、責任を持つということはかなり困難なこととなっています。その上、近年医療事故の増加がマスコミにより報道され、患者様の権利意識も高くなっており、医療への不信も生まれ安い環境となっています。それならなおさら一つ一つの医療行為について患者様に説明し、見通しを明らかにして患者様との信頼関係を築いておくことが重要であると考えます。

日本の医療現場では医療費の低コスト化に伴い人件費にしわ寄せが来ていて、特に高度医療を行う医療機関では技術的に難しい手術や処置が行われ、それにより医師の仕事量も増加しているにもかかわらず賃金は抑えられ、人員の増加もできず、なおかつ責任も重大で訴訟の起きやすい素地があると思われます。大学病院や小児病院などの高度医療を行う医療機関においては、医療費を高額に設定し、一般病院との差別化を図りながら患者様に厚い医療が行えるようにしていく必要があるのではないのでしょうか。

2005 年はまた個人情報保護法が施行された年でもありました。今までの個人情報に関する管理が甘かったことを認識させられるような事件もいくつも起き、世間を騒がせました。個人情報の入ったパソコンが盗まれるとか、ファイル交換ソフトにより個人情報が流出するなどです。特に重要な個人情報を扱う役所や金融機関で、必要がないのに個人情報を閲覧したことのある職員や社員が非常に多いという現実には、理念、理想と現実のギャップ、人のモラルが想定以上に低いことが明らかとなりました。普段の生活でもマンションや教材などの販売に関する電話がかかってきたり、見知らぬダイレクトメールが届いたりすると、非常に不信感がわきます。このように個人情報が流出すると被害者は不愉快な思いをするだけでなく、実害が及ぶ可能性もあり、注意深い取り扱いが必要です。とはいえ、学会や研究目的

で患者様の個人情報扱う機会が多いのも確かで、施錠やパスワードの設定などの管理の徹底を行っていく必要があります。現実には個人情報扱う人間の意識が低いことを前提とした、管理に関する教育やシステムの充実を行っていくべきでしょう。

さらに、医療現場に関連した法律では、障害者自立支援法があります。障害者自身にも医療や福祉に関する一定の負担を求めるこの法律は、障害者の反対運動にも関わらず 2005 年に制定されました。この法律が制定された裏で、育成医療の廃止が決まりました。障害者自立支援法に一本化されるためです。今までよりも患者の負担額が大きくなる上に、今後入院中の食費の負担が入るようになればさらに医療費がかかることとなります。また、自治体によっては対象疾患が縮小されたりするケースもあるかもしれません。厚生労働省では医療費の大きな増額はないと言っていますが、食費が一日 780 円かかれば一カ月で 23400 円を別に負担しなければなりません。重症ではないが継続して医療を受ける必要のある患者では、かえって大幅な負担増になる可能性もあります。小児では医療費を負担する両親が若いため、所得があまり高くなく、十分な医療を受けられなくなる可能性もあります。十分な審議をされ尽くした感のないこの法律ですが、2006 年 4 月から施行されます。

小児外科の医局にとっての 2005 年はいろいろと大変な年でもありました。手術件数が増加し、比較的メジャーな手術も増えています。医局員一人あたりの仕事量が増加し、「忙しい」感の強い年となりました。また、とても悲しい出来事もありました。研修中の木崎先生が突然亡くなられました。木崎先生は人柄もよく、私たちも大変期待を持って見守っていた先生でした。素直で自分の意志もちゃんとあり、経験を積んで良い医師になるはずの人でした。告別式に参列し、四十九日には山梨のご実家での法要にも行かせていただきました。大変惜しい人材を失ったと思っています。改めて、心からご冥福をお祈りいたします。

診療においてもご家族の期待に応えられずに自分たちの無力さを痛感させられる場面がありました。それでもご家族は私たちに変わらぬ信頼を寄せてくださり、大変ありがたく思っています。私たちはそのような期待に応えられるように、今後もなお一層精進していきたいと思っています。

変化は常に訪れるものであり、私たちはここにとどまるのではなく、変化に応じてさらに前進できるように自分も変わっていかなければなりません。そんなことを考えさせられた一年でした。

「2005 年を振り返って」

田原和典

獨協医科大学越谷病院小児外科に赴任して半年、赴任前は約 2 年間ドイツ留学をしていた

ので、帰国から計算するともう1年が過ぎたことになる。月日が経つのはあっという間である。私の卒業年度は平成6年なので医者となって12年、そのうち大学院生活の4年間を含め5年間を研究に費やしてきたので、医師人生のおよそ半分近くを研究に費やしてきたことになる。小腸移植をテーマにラットとデータを相手にした日々。臨床とは畑違いの世界に入り、慣れない動物手術と思考方法にとまどい、もがいた日々。次第に慣れることにより、その生活は充実したものとなっていったが、いつも心の片隅では臨床生活に戻りたい欲求と戻ることへの不安をかかえていた。

大学院4年目、博士論文の目途が大体ついた事とちょうど留学への誘いがあったことから、人生勉強の良いチャンスと考え、思い切って家族と共にドイツへと飛び立った。留学先はベートーベンの生家があることで有名なボン。統一前の西ドイツ時代は首都であったライン川沿いの町で、首都移転と共に昔からの落ち着きを取り戻した人口30万人程の静かな地方都市。この地で我々家族は生活を始めた。勤務先はボン大学外科で、小腸移植で知り合いになった先生からの紹介であった。このドイツでの生活は我々家族にとって有意義なものであった。異文化との交流、言葉の壁等いろいろなことを経験した。家族との生活を大切にすドイツ人環境に身を置いたことにより、妻と当時2歳であった双子の子供達と日本では考えられない程一緒に時間を過ごすことができ、家族の絆を深める良い機会となった。同時に自分自身のことを考える時間も増え、ますます心の中では臨床への期待と不安が大きくなっていった。最大の問題は5年のブランクであった。研修医・一般外科・小児外科と約7年臨床医をやった後、まだまだ多くの学ぶべきことを残したまま臨床を離れてしまったことで、自分の中に大きな不安を形成してしまったのである。

2005年2月19日、日本帰国。帰国後3月から6月までの4カ月間は、リハビリと称して東大小児外科での勤務となった。緊張と不安の中での臨床復帰。体が動かない。ちょっとしたことも思い出せない。やはり5年のブランクは大きいと実感。あらゆる処置に手間取り、これまで得た知識も心許ないものと化し、おまけに最新の医療情報も乏しい。まったくもって研修医に逆戻り(研修医よりタチが悪い)状態。とにかくミスをせず、迷惑をかけないようにとひたすらに神経をすり減らした。

そして7月。前任の高安先生が留学することによる人事で、獨協医科大学越谷病院への移動となった。東大でのわずか4カ月でブランクを取り戻すことは勿論できるはずもなく、使えない者のまま赴任することとなった。越谷病院に赴任した最初の印象は、“なんて忙しい現場だ！”だった。それもそのはず、赴任2日目のアッペを皮切りに、鎖肛、腸重積...そしてまたアッペと緊急手術の連続。“臨床の勤がまだ...”なんて言うてはいられない状況で、その場その場を対処することに追われる毎日が続いたからである。振り返ってみると、そこまで緊急手術が続いたことはたまたまであっただけで、本来はそこまで続く事はないことが

後に判明したのではあるが、”習うより慣れよ、慣れたらもう一度学べ”そんな修行を天が私に与えた気がした。そしてまた修行、修行、修行の日々。

今でも正直言って臨床の勘は完全に取り戻せてなく、恥ずかしいことであるがまだまだ諸先生方に教を乞う状態である。これが現実なのでしょうがない。5年のブランクは大きいとしみじみと実感させられる。しかしそんなことをいつまでもウジウジと悔やんでも先には進めないで、とにかく今ある状態をすこしでも改善・進化させて、臨床の場に少しでも貢献できるように精進しようと頑張っている。そしてようやくとまわりの事をちらっと考えられる余裕が出てきた今は、研究にも手を出し、基礎の方面からも医学会に貢献できればと思っている。

『W(ダブル) Happy Wedding!』

大谷祐之

10 カ月前～：プロポーズ 先方に御挨拶、マナー予習も効果なく、「お、お嬢さんを僕に下さい...」 静粛な進行、派手な演出、スタイリッシュにフォーマルに...挙式のイメージ
まとまらずブライダルフェア通い 式の日どり、大安吉日は1年以上先まで予約一杯 招待客リストアップ、浅広にて自分の親友の少なさに改めて涙 1日中、店員のウンチクにゲッソリのエンゲージリング選び

結婚記念日を忘れにくい日にと思い婚姻届...婚姻証明書と称して市役所の方にシャッターをねだり困惑される 両家顔合わせ、あいにくの天候に緊張し「本日はお日柄も良く...」

衣装選び、白無垢では角隠しきれず 2 DKに必要なのは豪華家具よりも収納力 招待状・ウェルカムボード・リングピロー等の手作りアイテムを業者をお願い

招待状発送 ✕切日を書き忘れいっこうに返信されてこない 配席に大いに悩み席次表作成 ブライダルエステ開始 婚礼料理選びに仏伊和折衷の試食

1カ月前～前夜：仕事仕事と手伝わない彼、結婚マニュアルに「男は褒めるのが一番」と「ケチるとバレバレ」の引出物鑑定団 女子アナ希望の司会者が... 極秘デート写真ばかりでプロフィールに使える2ショットなし 最終見積もり・打ち合わせに次々ツメアマ露呈 やっておいで良かったヘアメイクリハーサル 宛名間違い、衣装と引出物が雅叙園ならず叙々苑に届く 挙式披露宴代は前払いと知り自己破産 完全徹夜の理由は、緊張よりもドタバタ準備 マリッジブルーがピークに

当日：花嫁手紙の下書きで号泣と睡眠不足が顔に出て チャペルがひょうきん懺悔室で「それでは心労神父の入場です」 ウェディングドレスの裾持ちの子供は終始泣きじゃくり なんとマリッジリング忘れて EVL リング カメラに夢中でブーケトスは地面にポトリ...

広大なガーデンの素敵な披露宴会場は雨男×雨女で台風直撃 2分程度とお願いしていた来賓乾杯挨拶は1時間以上 新郎一族男性陣の薄っぴり・肥えっぴりに新婦は脅え 花嫁お色直し、ナース白衣で入場し大ウケ テーブル廻りで次々にお酌され目も廻り スピーチでやたらに「我慢が大切」「妥協は偉大なる知恵」 親友にスピーチ依頼、過去があらざらい暴露 コピー&ペースト棒読みの花婿謝辞に参列者一同苦笑.....ってな事になりませんように。

こんなふうに準備段階から破茶滅茶ではありますが、こんな素敵な言葉が心に残りました。「失敗しても全て良い思い出になる。」これからとっても楽しみです。

「不平等な生の時間」

山岸純子

「ねずみの時間・ぞうの時間」という本がある。それぞれ動物の寿命の長さが違うことから、それぞれの動物にとって、同じ時間長でも意味が異なるということを述べている。

この1年は、そんな本の存在を思い出させる年であった。重篤な障害で1度も病院の外に出ることなく人生を終えた児、病と治療の副作用と闘いながら息をひきとった児、新しい勤務地で意気揚々と仕事に取り組んでいた友人に訪れた突然の死、歳の近い知人への末期がんの宣告・・・

その人がもつ時間というのは生まれるときに決められているのだろうか。人が経験する幸や不幸の量は一生で換算すると同じなのだろうか。そうだとしたら、若くしてその生涯を終えた彼らは普通の人たちが一生かけて味わう喜びを凝縮して実感できたのであろうか。生産性も持たずに怠惰な日々を送る人間はいくらでもいるのに、なぜ彼らが選ばれてしまったのか・・・医学を学び医療に従事する私が、そんな精神論的なことに思いをはせるのはナンセンスだろうか。勿論、医師として関わった人々に対しては後悔や反省し学んだことも多々ある。そんなことは重々承知しているが、それでも白衣を脱ぐと悔しさと悲しさに涙が止まらなかった。

10年前、私の父は48歳で亡くなった。私の浪人生活が始まる頃と同じくして病気の宣告を受け、医師を志す私を1番に応援してくれていた父は、私の医学部受験を待つことなく命を終えた。あまりにも早い父の死を、母も私も家族も親戚も、しばらくは受け入れられないでいた。悲しみよりも納得のいかない悔しさ、が当時の心境に1番近い気持ちであろう。しかし、時間の経過に連れ、私たちは次第に気持ちの整理をすることが出来るようになっていった。その時に私たちが話したのは、父は一生分の楽しみを十分味わい尽くして逝ったのだということ(父は美食家で車が好きであった)、また、きっと父に対して満足のいく最期を

与えることが出来ただろうということ（昼も夜も父の傍から人がいないことはなかった）、という内容であった。ある意味、そう考えることで自分たちを納得させようとしていたのかもしれない。

「ねずみの時間・ぞうの時間」を人間の感情にまで反映するには時間がかかるようだ。どんなお金持ちでもまだまだ成功したいと思っているかもしれないし、大往生を遂げたとされる人でもまだまだやりたいことがあるかもしれない。またその気持ちはその人に関わる家族・友人にとっても、同じことが言えるだろう。「生きていた人が「死」を迎えると、「死」は突然にその人の「もの」ではなく周囲の人々の「もの」になる。誰かを亡くして涙するのは、その人を失ったことが悲しくて泣いているのではなく、その人を失った自分が可哀想で泣くのだ、という文章を読んで妙に納得したことを思い出す。死後の世界で人はどんな思いで自分の死を受け入れるのかは分からないが、その人が笑顔で、残された自分たちを見守ってくれていることを期待し想像しながら私たちは日々を過ごす。

死と関わらない訳にはいられない医療の現場にいる私に出来ることは、亡くなった患者さんのことを思い出して泣することではなく、そのときに学んだ知識や経験を日々の診療に反映していくことだ。春からは悪性腫瘍の多い成人外科での勤務となる。同じ後悔や反省を繰り返すわけにはいかない。そんな気持ちを胸に働く私の姿を彼らが温かい目で見守ってくれていることを期待して、私は今日も仕事に励む。（でも、やっぱり泣いてしまいます・・・（ ; _ ; ））

「無題」

畑中政博

5000年以上の昔から人とお酒の関係は続いてきました。中世の錬金術が蒸留という方法を見つけ出すまで自然界でのアルコール発酵をもとにした醸造酒が世界中の主流でした。アルコール発酵ではアルコール度数は最高でも20度ぐらいが限界であったのが、この蒸留という方法によって、数倍ものアルコール度数の酒つまり蒸留酒が誕生するのです。現在はさまざまな蒸留酒がありますが、中世の頃はこの蒸留酒はエリクサー（霊薬）と呼ばれ、まさに万病に効く薬として大変珍重されました。

お酒を少々嗜むのが好きな私にとって、いろいろある酒の中で一番好きなものといわれたらウヰスキーが一番好きであります。仕事終わりのビールも捨てがたいのですが。

良いウヰスキーとは？と聞かれることがたまにございます。「飲んだ瞬間にその酒の育った風景、土地の香り、気候、風土、そういったものが頭の中に思い浮かぶ」という人もいます。私の一番大好きなバランタイン17年を生み出したマスターブレンダー（調合師）ロバー

ト・ヒックスさんは飲んだときに一枚の絵画が思い浮かぶそうです。これは主にブレンドを行っているときの仕事上の話ではありますが、私も含めて大部分の方はそのような経験は難しいと思われる。私自身は大変曖昧な表現ではありますが、まるやかであることに尽きると思います。アルコール度数が高いと、どうしてもまるやかさよりもアルコールのツンとした感じが邪魔をして香りや味がわかりづらいと言われます。常温のお水(ミネラルウォーター等)で割ってアルコール度数が20度ぐらいになるとあのツンとした感じは消えうせ、ウヰスキーがもつ本来の味と香りがお楽しみ頂けるかと思えます。まるやかである。これが私の良いウヰスキーの第一条件であります。実はこのまるやかさを科学的に解明した方がおります。我が大学時代の恩師であります。同じ銘柄のウヰスキー数種類(5年10年20年30年)を科学的に分析したところ、年数が経ったものほど水の分子とアルコールの分子が分子レベルで均一に混ざり合っているそうです。そしてこれがまるやかさの正体だとおっしゃいました。同じ銘柄でも年数の違いや製造した年によって味も香りも変わってきますが、このまるやかさがある初めて味と香りが引き立つのです。味、香りに関してはさまざまなタイプがございます。私は今流行のシングルモルトウヰスキーよりはブレンデットウヰスキーの方が好みであります。シングルモルトとブレンデットの違いは前者は単一の蒸留所で作られたもので、後者は数カ所~数十カ所の蒸留所で作られたウヰスキーをブレンドしたものだと思っただけで結構です。私の中ではバイオリンやピアノの独奏とフルオーケストラの違いといったイメージがあります。味、香りに関しては演奏する曲目が違うようにものによってさまざまです。良いウヰスキーの第一条件であるまるやかさはまさに演奏者の年季そのものなのです。若くして天才と呼ばれる演奏者がいるようにウヰスキーにも若い年数でも素晴らしいものはたくさんあります。しかし私としては円熟の極みを感じるようなそういったものが好みであります。

「良いウヰスキーは作り手の人柄や、気候、風土を伝えてくる。」

「良いウヰスキーほど自ら語りかけてくる。」

こんな言葉を耳にしたことがあります。私が医者となってまだ2年。スーパーローテーションを終えようやくこれから小児外科を目指す私はウヰスキーでいえばまさに樽詰めされたばかりの状態。人様においしく飲んでもらえるまであと何年かかることやら。自分が好むウヰスキーにはまったく程遠いですが、じっくりじっくり熟成していきたいと思う今日この頃であります。



留学報告

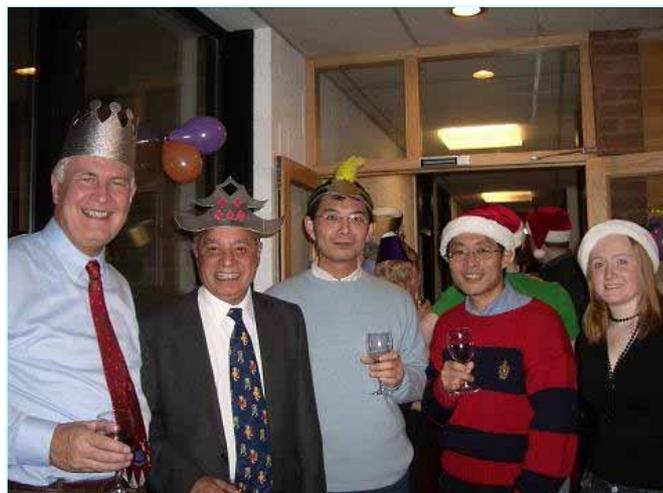
高安 肇

2005年7月よりアイルランド、ダブリンのOur Lady's Hospital for Sick ChildrenにあるChildren's Research Centreに留学をさせていただいています。こちらのPrem Puri教授はPaediatric Surgery InternationalのEditor in Chiefとして御高名で、本邦小児外科の先輩にPuri教授の薫陶を受けた方も珍しくありません。その末席を汚すものとして大阪大学、順天堂大学の小児外科の先生方と研究にいそしんでいます。

アイルランドはイギリス本島の隣に位置し、北極圏も目前ですが、暖流の影響で冬でも氷点下になることは稀です。夏は夜11時まで明るく、冬は午後4時には日が暮れます。にわか雨が多く、右を見ると雨、左を見ると青空と虹、という風景も珍しくはありません。某雑誌の企画で「世界で最も住みやすい国」の一つにランクインしていますが、あたたかい人間関係、治安の良さ、著しい経済発展、英語圏であることが、その理由となっています。

Puri教授は多忙で、早朝にしかお会い出来ませんが、常に前向きで、我々日本人の下手な英語にも耳を傾け、時には祝日をつぶしてマンツーマンで学会抄録の指導をして下さいます。7月にダブリンで開催された英国小児外科学会では、高名な先生方とお話が出来、Puri教室輩出の日本の諸先輩方にお会いして留学生活につき具体的なイメージがわいたことは大きな収穫でした。

ヒルシュスプルング氏病や、その類縁疾患の研究で有名になった教室ですが、現在、横隔膜ヘルニアや食道閉鎖などのモデル動物、膀胱尿管逆流現象の原因遺伝子検索などが主なプロジェクトとなっています。私は横隔膜ヘルニアにおける肺低形成の分子生物学的病態解析に携わっております。



Puri教授（左から2人目）と筆者（右から2人目）

さて、英国では医師が病院内に週に 55 時間以上いることを厳しく禁じており、アイルランドでも似たような労働環境です。一方で、てんかんの子供が小児科医の診察を 6 カ月、癌の方が手術を 3 カ月待たされています。日本並みの医療を希望する場合は高額なプライベートクリニックへ行くしかありません。そのため事情の良い東欧諸国へ「入院旅行」をする方が多いようです。英国は先進国では最も厳しい医療費抑制を行った(二番手が日本、英国を抜くべく邁進中)わけですが、満足な医療を受けられず手遅れになる方が続出し、現在建て直しの最中です。極端に厳しい医療費抑制政策に対して医療関係者が反発し、自分たちの待遇を堅守した結果とも言えそうです。日本は、5年から10年遅れで同様の経緯をたどっていると思われる方が多いようですが、いかがでしょうか？

最後になりましたが、留学にあたり色々ご配慮くださった多くの皆様に、心より感謝申し上げます。



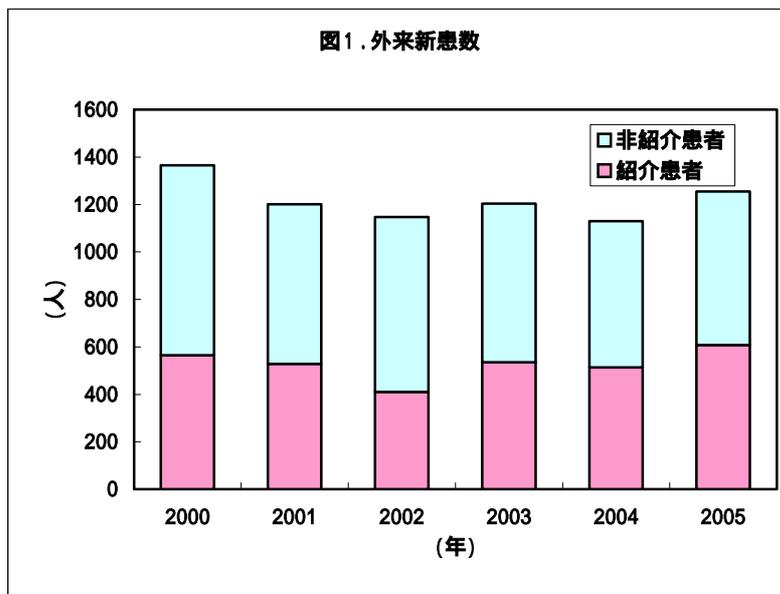
タラの丘にて
「風とともに去りぬ」のラストで主人公が「タラの丘へ」と叫ぶシーンがある、アイルランド系アメリカ移民の心のふるさとである



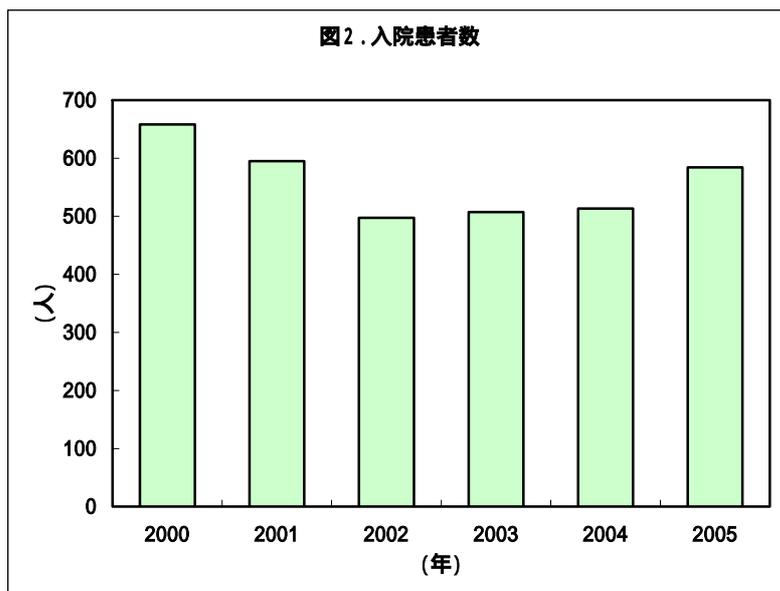
診療の集計

1. 外来および入院

2005年の外来延べ患者数は5299名、うち新患数は1255名でその紹介率は48.4%であった(図1)。

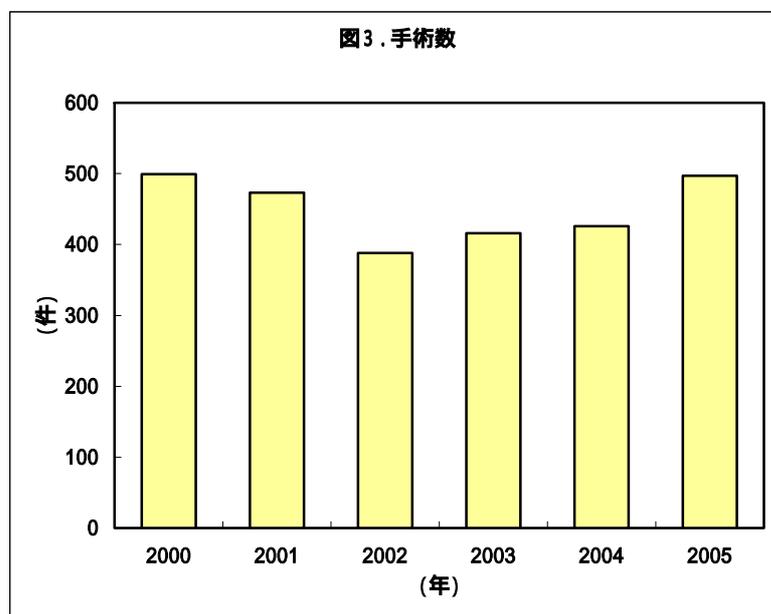


一方、2005年の入院患者数は584名、うち新生児入院数14名であった(図2)。



2. 手術

2005年の手術数は497件、うち新生児手術数は12件であった(図3)。



研究業績

1. 論文発表

「原著」

- 1) Tahara K, Murakami T, Fujishiro J, Takahashi M, Inoue S, Hashizume K, Matsuno K, Kobayashi E. Regeneration of the rat neonatal intestine in transplantation. *Ann Surg* 242:124-132, 2005
- 2) Fujishiro J, Tahara K, Inoue S, Kaneko T, Kaneko M, Hashizume K, Kobayashi E. Immunologic benefits of longer graft in rat allogenic small bowel transplantation. *Transplantation* 79:190-195, 2005
- 3) 土田嘉昭、森川康英、秦 順一、細井 創、原 純一、太田 茂、池田 均、正木英一、岸本誠司、熊谷昌明、川口智義：横紋筋肉腫の集学的治療に関する研究。小児がん 42:11-17, 2005

「症例報告」

- 1) Takayasu H, Ishimaru Y, Kisaki Y, Nakai H, Ueda Y, Ikeda H. Diffuse xanthogranulomatous pyelonephritis in a patient with myotonic dystrophy and cerebral palsy. *Int J Urol* 12:497-499, 2005
- 2) Otani Y, Takayasu H, Ishimaru Y, Okamura K, Yamagishi J, Ikeda H. Secretion and expression of epithelial markers supports biliary origin of solitary nonparasitic cyst of the liver in infancy. *J Pediatr Surg* 40:E27-E30, 2005
- 3) Fujino J, Kimura K, Shiratori Y, Kitazumi Y, Mimura H, Okada S. A case of Churg-strauss syndrome diagnosed by characteristic skin lesions and gastrointestinal involvement. *Prog Dig Endosc* 67:142-144, 2005
- 4) 石丸由紀、木崎義行、藤野順子、山岸純子、大谷祐之、高安 肇、池田 均：重症心身障害児の胃食道逆流症に対する食道胃分離術の経験。日小外会誌 41:226-231, 2005
- 5) 高安 肇、木崎義行、石丸由紀、岡邨香織、池田 均：Morgagni 孔ヘルニアに対する腹腔鏡補助下腹壁外結紮法(La Greca-Azzie 法)の経験。日臨外会誌 66:1600-1604, 2005
- 6) 高安 肇、山岸純子、大谷祐之、石丸由紀、池田 均：共通管内結石を有し膵炎を発症した胆石症の 1 例。第 95 回東京小児外科学会抄録集 35:21-23, 2005
- 7) 山岸純子、山本英輝、石丸由紀、高安 肇、大谷祐之、池田 均：外傷性膵仮性嚢胞の 1 例。第 95 回東京小児外科学会抄録集 35:53-55, 2005
- 8) 黒岩 実、設楽利二、池田 均、鈴木則夫、土田嘉昭：異なった経過をとった(乳児)血管外皮腫の 2 例。小児がん 42:69-73, 2005

「著書・総説・その他」

- 1) Ikeda H, Matsunaga T, Tsuchida Y. Hepatic tumours. In Cancer in Children (eds., Voûte PA, Barrett A, Stevens MCG, Caron HN). Oxford University Press, Oxford, 2005, pp370-383
- 2) Tsuchida Y, Shitara T, Kuroiwa M, Ikeda H. Current treatment and future directions in neuroblastoma. in Advances in Pediatrics-1 (eds., Saxena A, Rao PS, Choudhry VP, Arya LS, Kalra V, Verma IC), Ambassador, New Delhi, 2005, pp76-82
- 3) 池田 均：神経芽腫（神経芽細胞腫）。家庭の医学、保健同人社、2005, pp859-861
- 4) 池田 均、大谷祐之：奇形症候群・染色体異常に合併した中腸軸捻転の診断と治療。小児外科 37:791-795, 2005
- 5) 池田 均：小児の癌、獨協医学会雑誌 32:255-263, 2005
- 6) 池田 均、谷村雅子：第 41 回日本周産期・新生児医学会学術集会記録「シンポジウム講演：低出生体重児と肝芽腫：疫学研究から基礎研究へ」。周産期新生児誌 41:699-702, 2005
- 7) 石丸由紀：小児の乳腺腫脹、日本醫事新報 4243:92-93, 2005
- 8) 田原和典、杉山正彦、金森 豊、朝長哲弥、橋都浩平：慢性膵炎に対する十二指腸温存膵頭部切除術。小児外科 37:1149-1153, 2005
- 9) 大谷祐之、石丸由紀、高安 肇、山岸純子、池田 均：小児腹腔鏡手術の経験。越谷市医師会会報 43:49, 2005
- 10) 鈴木則夫、黒岩 実、設楽利二、池田 均：局所再発をきたした後頭部 hemangiopericytoma 乳児例での腫瘍再切除術。小児外科 37:1095-1100, 2005
- 11) 常盤和明、池田 均、西村真一郎：日本小児がん学会抗がん剤適正使用ガイドライン：小児肝癌。小児がん 42:335-341, 2005
- 12) 林 富、池田 均：総会記録：要望演題 4「神経芽腫マス・スクリーニング休止後を考える」。小児がん 42:9-10, 2005

2. 学会・研究会への参加

「口演発表」

- 1) 関根 望、山本悦子、木村美寿々、小倉裕美子、鈴木 愛、山浦由美子、福田裕美、佐藤澄子：多発奇形児の人工肛門管理と親の関わりについて。第 19 回日本小児ストーマ・排泄管理研究会、2005.2.4、高知
- 2) 高安 肇、山岸純子、畑中政博、大谷祐之、石丸由紀、池田 均：胸腔鏡下に摘出した気管支原性嚢胞の一例。第 13 回クリニカル・ビデオフォーラム(CVF)、2005.2.5、東京
- 3) 山岸純子、石丸由紀、高安 肇、大谷祐之、池田 均：腫瘍破裂による腹痛で発症した

- 卵巣原発卵黄嚢腫瘍の1例。関東甲信越地区小児がん研究会、2005.2.5、東京
- 4) 石丸由紀、山岸純子、大谷祐之、高安 肇、池田 均：胃食道逆流症(GERD)における食道胃分離術(EGD)：治療効果、合併症、手術適応について。第35回日本小児消化管機能研究会、2005.2.26、横浜
 - 5) 山岸純子、大谷祐之、高安 肇、石丸由紀、池田 均：肥厚性幽門狭窄症における膈上部弧状(膈輪)切開法の検討。第42回埼玉県医学会総会、2005.2.27、さいたま市
 - 6) 高安 肇、山岸純子、大谷祐之、石丸由紀、池田 均：脾過誤腫として経過観察している1例。第18回日本小児脾臓研究会、2005.3.5、さいたま市
 - 7) 山岸純子、石丸由紀、高安 肇、大谷祐之、池田 均：皮膚移植を施行した巨大膈帯ヘルニアの1例。第15回関東小児外科症例検討会、2005.3.19、東京
 - 8) Ikeda H, Okamura K, Yamamoto H, Ishimaru Y, Takayasu H, Otani Y, Yamagishi J, Nagashima K, Takahashi A, Kuwano H. Clinical characteristics and surgical treatment of perianal and perineal rhabdomyosarcoma: Analysis of Japanese patients and comparison with IRS reports. The 38th Annual Meeting of the Pacific Association of Pediatric Surgeons, 2005.5.22-26, Vancouver, Canada
 - 9) Takayasu H, Ishimaru Y, Ikeda H. Hypoxia-hyperoxia stress affects fetal rat hepatocyte differentiation. The 42nd meeting of the Japanese Society of Pediatric Surgeons, 2005.6.1-3, Chiba, Japan
 - 10) 石丸由紀、山岸純子、大谷祐之、高安 肇、池田 均：重症心身障害児の胃食道逆流症(GERD)に対する食道胃分離術(EGD)の経験。第42回日本小児外科学会総会、2005.6.1-3、千葉
 - 11) 高安 肇、山岸純子、大谷祐之、石丸由紀、池田 均：短期入院手術症例における術前検査の効用に関する検討。第42回日本小児外科学会総会、2005.6.1-3、千葉
 - 12) 大谷祐之、高安 肇、石丸由紀、山岸純子、池田 均：非触知精巣の診断と治療。第42回日本小児外科学会総会、2005.6.1-3、千葉
 - 13) 山岸純子、石丸由紀、高安 肇、大谷祐之、池田 均：肥厚性幽門狭窄症における膈上部弧状(膈輪)切開法の検討。第42回日本小児外科学会総会、2005.6.1-3、千葉
 - 14) 藤野順子、木村一史、白鳥泰正、北角嘉徳、三村治美：皮疹を契機に診断しえた Churg-Strauss 症候群の一例。第64回日本消化器内視鏡学会関東地方会、2005.6.4、東京
 - 15) 大谷祐之、高安 肇、石丸由紀、山岸純子、池田 均：第1・第2鰓弓症候群に合併した腸回転異常症・中腸軸捻転の1例。第797回外科集談会、2005.6.18、東京
 - 16) 山岸純子、石丸由紀、大谷祐之、高安 肇、池田 均：新生児期に遷延性黄疸で発症した胆道拡張症の1例。第797回外科集談会、2005.6.18、東京

- 17) 大谷祐之、山岸純子、石丸由紀、高安 肇、池田 均：小児の顔面および口腔刺創。第 19 回小児救急医学会、2005.7.1-2、仙台
- 18) 大谷祐之、山岸純子、石丸由紀、高安 肇、池田 均：当科における小児内視鏡検査・治療の実際。第 32 回小児内視鏡研究会、2005.7.2-3、盛岡
- 19) 山岸純子、石丸由紀、大谷祐之、高安 肇、池田 均：新生児期に遷延性黄疸で発症した胆道拡張症の 1 例。第 7 回越谷市医師会学術集会、2005.7.9、越谷
- 20) 池田 均、高安 肇、石丸由紀：シンポジウム「周産期・新生児悪性腫瘍」、低出生体重児と肝芽腫：疫学研究から基礎研究へ。第 41 回日本周産期・新生児医学会学術集会、2005.7.10、福岡
- 21) 池田 均：横紋筋肉腫局所外科治療に関する臨床研究。厚生労働省がん研究助成金森川班平成 17 年度第 1 回班会議、2005.7.29、東京
- 22) 村松英俊、蓮見俊彰、浜島昭人、池田 均、石丸由紀：踵に発生した異所性趾の一例。第 23 回昭和大学医学部形成外科学教室同門会学術集会、2005.9.10、東京
- 23) Ikeda H, Ishimaru Y, Takayasu H, Fujino J, Kisaki Y, Otani Y, Yamagishi J. Efficacy of granulocytapheresis (GCAP) in pediatric patients with ulcerative colitis. The 26th Congress of the Greek Association of Paediatric Surgeons, 2005.9.16-18, Santorini, Greece
- 24) 大谷祐之、山岸純子、田原和典、石丸由紀、高安 肇、池田 均：緊急減黄術を必要とした膵管胆道合流異常症の 1 例。第 16 回関東小児外科症例検討会、2005.9.17、東京
- 25) Ishimaru Y, Nakai H, Yasuda K, Ikeda H. Congenital penile agenesis: An experience in the treatment of a quite rare anomaly. The 7th annual meeting of the Asia Pacific Association of Pediatric Urologists (APAPU), 2005.9.29-30, Kyoto, Japan
- 26) 大谷祐之、山岸純子、田原和典、石丸由紀、高安 肇、池田 均：緊急減黄術を必要とした膵管胆道合流異常症の 1 例。第 28 回日本膵管胆道合流異常研究会、2005.10.15、東京
- 27) 石丸由紀、高安 肇、大谷祐之、山岸純子、田原和典、池田 均：H 型気管食道瘻 (Gross E 型食道閉鎖症) の 1 例。第 40 回日本小児外科学会関東甲信越地方会、2005.10.29、甲府
- 28) 山岸純子、石丸由紀、大谷祐之、田原和典、高安 肇、池田 均：高度な腹腔・胸郭低形成をとまなう ruptured omphalocele の 1 例。第 40 回日本小児外科学会関東甲信越地方会、2005.10.29、甲府
- 29) 石丸由紀、大谷祐之、山岸純子、田原和典、池田 均：内視鏡・腹腔鏡併用にて固定した胃軸捻転症の 1 例。第 25 回日本小児内視鏡外科・手術手技研究会、2005.11.4-5、新潟

- 30) 山岸純子、石丸由紀、浜島昭人、蓮見俊彰、大谷祐之、田原和典、高安 肇、池田 均：皮膚移植を含む多期手術を施行した ruptured omphalocele の 1 例。第 25 回日本小児内視鏡外科・手術手技研究会、2005.11.4-5、新潟
- 31) 石丸由紀、大谷祐之、山岸純子、池田 均：ビデオシンポジウム「小児鏡視下手術の適応と手技」。第 67 回日本臨床外科学会総会、2005.11.9-11、東京
- 32) 田原和典、鈴木 完、仲西博子、朝長哲弥、杉山正彦、金森 豊、橋都浩平：肛門周囲原発横紋筋肉腫 2 例に対する治療方針の検討。第 21 回日本小児がん学会、2005.11.25-26、宇都宮
- 33) 田原和典、池田 均：小腸移植における小腸筋層内マクロファージ活性化の影響について。第 33 回獨協医学会、2005.12.3、壬生
- 34) 田原和典、大谷祐之、山岸純子、石丸由紀、池田 均：ダウン症候群・血小板減少症(TAM)を合併した十二指腸閉鎖症の 1 例。第 97 回東京小児外科研究会、2005.12.6、東京
- 35) 池田 均：低出生体重児と肝芽腫：疫学・臨床研究と DNA 酸化障害関与の仮説について。平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金（第 3 次対がん総合戦略研究事業）「難治性小児がんの臨床的特性の分子情報とその理論を応用した診断・治療法の開発（秦班）」平成 17 年度第 1 回班会議、2005.12.15、東京
- 36) 田原和典、大谷祐之、山岸純子、石丸由紀、池田 均：腹部原発小児悪性リンパ腫における外科治療の役割：当施設 7 例の検討。第 799 回外科集談会、2005.12.17、東京

「症例提示」

- 1) 山岸純子：後腹膜腫瘍（1 カ月、男児）。川口フィルム・カンファレンス、2005.3.3、川口市立医療センター
- 2) 大谷祐之：両側肺病変（11 カ月、男児）。川口フィルム・カンファレンス、2005.4.14、川口市立医療センター
- 3) 山岸純子：一時的人工肛門造設により回復した難治性骨盤内膿瘍の 1 例。第 40 回埼玉県小児外科症例検討会、2005.7.5、川越
- 4) 大谷祐之：胃粘膜下腫瘍（異所性脾）の 1 例。第 41 回埼玉県小児外科症例検討会、2005.11.29、さいたま

「座長・当番幹事」

- 1) 池田 均：日本小児肝癌スタディグループ研究会 2005、「合併症」座長、2005.1.22、東京
- 2) 池田 均：第 18 回日本小児脾臓研究会、「一般演題：セッション 3」座長、2005.3.5、

さいたま市

- 3) 池田 均：第 42 回日本小児外科学会総会、「要望演題 3：難治性腎芽腫・難治性肝芽腫に対する治療の工夫」座長、2005.6.3、千葉
- 4) 池田 均：第 21 回日本小児がん学会、「一般演題：肝芽腫」座長、2005.11.25、宇都宮
- 5) 池田 均：第 41 回埼玉県小児外科症例検討会、当番幹事、2005.11.29、さいたま市

3. 研究助成

- 1) 平成 17 年度科学研究費、「低出生体重児における肝芽腫発生の機序に関する研究」(研究代表者、池田 均)、500,000 円
- 2) 平成 17 年度科学研究費(基盤研究 A)、「治療過程管理を導入した小児横紋筋肉腫に対する臨床試験と遺伝子解析研究」(分担研究者、池田 均)、150,000 円
- 3) 平成 17 年度厚生労働省がん研究助成金、「小児横紋筋肉腫に対する中央病理診断および遺伝子診断にもとづく臨床試験の確立と新規治療開発に関する研究」(分担研究者、池田 均)、1,600,000 円
- 4) 平成 17 年度厚生労働省第 3 次対がん 10 ヶ年総合戦略研究助成金、「難治性小児がんの臨床的特性の分子情報とその理論を応用した診断・治療法の開発」(主任研究者、秦 順一)、700,000 円

4. 学位 該当者なし

教育関連の活動

1. 学生実習

医学部5年生を対象とした Bedside Learning(BSL)を担当した。診療参加型の BSL であり、朝8時30分のミーティングから診療終了時刻まで学生は担当医とともに過ごした。担当医は病歴聴取、診察、検査、手術(術前準備から術後管理まで)、診療記録の記載などの基本とその実際を指導した。学生は可能な限り緊急手術にも立ち会い、回診、カンファレンス、症例検討会、セミナーなどを通じ小児外科疾患の病態、診断、治療に関する基本的知識が得られるよう、さらにチーム医療の実際を体験できるよう配慮した。学生には個別にテーマを与え、学習した内容を短時間でプレゼンテーションする機会も与えた。

2. 卒後臨床研修

1年目の初期研修医5名が外科選択科目として1カ月間の小児外科臨床研修を行った。研修は越谷病院臨床研修プログラムに従い実施された。

3. 講演・講義

- 1) 池田 均：「周産期医療と小児外科：最近の新生児外科のトピックスを中心に」、川口市医師会講演会、2005.2.23、川口
- 2) 池田 均：「消化管の発生と小児外科」、獨協医科大学講義(2年生)「消化・吸収・栄養の科学」、2005.6.14、壬生
- 3) 池田 均：「小児がんの病態と診断ならびに治療」、群馬大学第一外科実践臨床病態学講義(6年生)、2005.6.17、前橋

4. セミナーの開催

小児外科および関連領域の最新の情報を得ることを目的に、院内外の医師、看護師、コメディカル、学生を対象に小児外科・周産期外科セミナーを開催した。実施セミナーは以下のとおりである。

- 1) 第23回小児外科・周産期外科セミナー
講師：さいたま市立病院小児外科部長、中野美和子先生
演題：「排便障害の病態と治療」
2005.3.1、獨協医科大学越谷病院
- 2) 第24回小児外科・周産期外科セミナー
講師：埼玉県立小児医療センター外科部長、岩中 督先生

- 演題：「新生児・乳児に対する内視鏡手術」
2005.4.22、獨協医科大学越谷病院
- 3) 第25回小児外科・周産期外科セミナー
講師：池袋医院理事長、池袋賢一先生
演題：「小児の外科的気道病変」
2005.7.8、獨協医科大学越谷病院
- 4) 第26回小児外科・周産期外科セミナー
講師：小児外科講師、田原和典先生
演題：「小腸移植：特に小腸筋層内マクロファージ活性化の影響について」
2005.9.9、獨協医科大学越谷病院
- 5) 第27回小児外科・周産期外科セミナー
講師：千葉県立がんセンター生化学研究部、山本英輝先生
演題：「肝芽腫発生に寄与する分子機構の解析」
2005.11.8、獨協医科大学越谷病院

5. 小児外科・病理カンファレンス

小児外科と病理のカンファレンスを開催した。2005年は病理部教授の移動にともない1回のみで開催に止まった。

- 1) 第15回小児外科・病理カンファレンス、2005.9.2
- (1) 1歳、女兒、仙尾部奇形腫
 - (2) 3歳、女兒、背部母斑
 - (3) 2カ月、男児、骨盤内腫瘤、肉芽腫
 - (4) 2歳、男児、精索付着腫瘤、異所性副腎組織
 - (5) 2歳、男児、後腹膜リンパ管腫
 - (6) 1歳、男児、両側ウィルムス腫瘍
 - (7) 4歳、男児、S状結腸若年性ポリープ
 - (8) 2歳、女兒、ヒルシュスプルング病疑い
 - (9) 3歳、男児、先天性胆道拡張症

6. 抄読会

2005年は37回(抄読論文数70)の抄読会を行った。

その他

「寄稿」

- 1) 池田 均：「獨協医科大学越谷病院小児外科」、医者がすすめる専門病院（編集、中村康生）、ライフ企画 2005
- 2) 池田 均：「群馬県立小児医療センター小児外科と土田嘉昭先生：ご退官を祝して」、群馬県立小児医療センター近年のあゆみ 2005, pp109-111
- 3) 池田 均：「母校にのぞむ：人材を育成する校風の熟成と教育システムの充実を」、群馬大学医学部刀城クラブ会報 197:10, 2005
- 4) 池田 均：「研修医諸君！ - 世に出るための3か条 -」、獨協医科大学越谷病院図書室報 19(2), 2005
- 5) 池田 均：「あしがき」、日小外会誌 41(1), 2005
- 6) 池田 均：「あしがき」、日小外会誌 41(2), 2005
- 7) 池田 均：「あしがき」、日小外会誌 41(4), 2005
- 8) 池田 均：「あしがき」、日小外会誌 41(5), 2005
- 9) 池田 均：「あしがき」、日小外会誌 41(6), 2005
- 10) 池田 均：「あしがき」、日小外会誌 41(7), 2005
- 11) 池田 均：「病を知る：鎖肛」、日本経済新聞 2005.3.15（夕刊）（取材）
- 12) 池田 均：「超低出生体重児の肝芽腫：酸素投与が有意な発症リスク要因」、Medical Tribune 38(33), 2005（取材）

編集後記

アテネから飛行機で 30 分ばかりのサントリニ島で開かれたギリシャ小児外科学会に参加した。一昨年はイタリアの小児外科学会に参加したが、いずれも会場の参加者は 20 人から 30 人程度。延べの参加者はもう少し多いのだろうが、わが国の小児外科学会総会とは比べものにならない小ぢんまりとした研究会の規模である。

昨今、小児科医や産科医の数が減少し、必然的に周産期や小児救急医療施設の再編が進んでいる。外科の領域においてもこれを志す若い医師が減少しており、いずれわが国の小児外科学会もギリシャやイタリアの学会と同程度に縮小するのではないかと気がする。しかし、これは医療を受ける側にとって必ずしも不幸なことではないとも思える。世は少子化の時代である。ヨーロッパの先進国と同様、少数精鋭の小児外科医集団がいればそれで十分ではないか。もちろん、多少、病院は遠くなり、手術の待時間は長くなるだろうが。

フィラの町の小さなカンファレンスルームに集まったエリートたちは、少数であるが故の高給取りなのだろうか。サントリニ島と隣のサントリニ管は何か関係があるのだろうか〔後者はイタリアの高名な解剖学者 Giovanni Domenico Santorini (1681-1737) に因んだ呼び名で前者とは無関係〕。エーゲ海の水平に沈む夕陽を見ながらそんなことを思った。

(池田)

獨協医科大学越谷病院小児外科のあゆみ 2005 年

平成 18 年 3 月 31 日発行

編集・発行 獨協医科大学越谷病院小児外科
〒343-8555 埼玉県越谷市南越谷 2-1-50
TEL 048-965-1111(内線 2600)

印刷所 (株)松井ピ・テ・オ・印刷
TEL 028-662-2511(代)
